

外国語使用における「快適さ」に対する自己評価とセルフ・エスティームの関係についての考察

田所 真生子*

Self-Esteem and Self-Evaluation in a Foreign Language Acquisition: The Case of Japanese Students in the United States.

Makiko TADOKORO*

Abstract

Learners' affective factors, such as anxiety and restlessness, have been said that they hamper second language acquisition. This study investigated how international students from Japan in the United States evaluate their own English ability, and how their global self-esteem affects their comfort level. One hundred and six community college and English school students completed the take-home anonymous questionnaire. Correlation coefficients among length of stay, objective English proficiency (in this study, TOEFL score) comfort with communicating in English, self-evaluation of English ability, and global self-esteem, were generated. Multiple regression analysis was also conducted. The results showed that the students evaluated their English ability with fair accuracy, and that global self-esteem and self-evaluation more than objective English ability and length of stay affected their comfort level. These results implied global self-esteem can be an affective factor in second language acquisition.

はじめに

外国語習得研究の分野において、効果的な教授法の開発から学習者に内在する要因へと関心が広がるに従い、学習者の情意的要因に焦点を当てた研究が行われるようになってきた。そして、その多くは学習者の「不安」「動機づけ」「主観的自己評価」等を扱っており、このような情意的要因が、学習者の外国語習得を促進したり、阻害することが実証的に明らかとなっている(倉八:1995)。しかし、これらの研究は外国語

教授場面を対象としており、教授場面を離れた生活場面での外国語使用者の情意的要因を扱った研究は殆ど行われていない。外国語学習・習得の研究では教育実践的な面が強調され、習得とは授業で良い成績を修めることを意味しているとも言える。しかし、外国語教育の最終目的を実践としての言語使用とするならば、教室を出た状態の学習者の情意的要因にも目が向けられるべきであろう。なぜなら、教室場面でいくら学習者の心理的障害を取り除く努力が重ねられても、教室を出れば彼等はまた別の心

* 名古屋大学大学院国際開発研究科講師

理的状況にさらされるからである。

外国語使用場面を見てみると、外国語運用能力に関わらず、必要以上の心理的負担に悩む者がいる。決して高いとはいえぬ語学力で、気楽にコミュニケーションを楽しみ、堂々と渡り歩いて行く者もいれば、高い語学力を持ちながらもそれを認めることができず、自分の不甲斐なさに悩み、疲れ果ててしまう者がいる。ときに、周りの者からは、とても流暢な外国語でコミュニケーションを楽しんでいるように見える人が、実は不安で落ち着かず、恐れさえ感じていると打ち明けることがある。このような違いはなぜ起こるのであろうか、また、どのように説明できるのであろうか。これらの問いをセルフ・エスティーム (Self-Esteem: 自尊感情) の視点を交えて考えてみたい。

本稿では、目標言語圏 (習得を目標としている言語が使われている地域) での滞在期間や目標言語の習熟度に関わらず、その目標言語使用における快適さ (Comfort) に個人差があるという経験的事実に着目した。そして、アメリカに滞在している日本人留学生を対象に、彼等の英語力に対する自己評価とセルフ・エスティームが、英語使用における快適さとどのように関係しているかを調査分析する。

・ セルフ・エスティームとは

本稿では、外国語学習者の情意的要因研究を理論的枠組みとするが、ここにセルフ・エスティームの概念を導入するにあたり、本稿における定義を示しておく。

セルフ・エスティームに関する研究は多数行われているが、その定義や解釈の仕方

は様々である。Brown (1998) は過去の文献を整理し、「グローバル・セルフ・エスティーム (Global Self-Esteem)」「自己評価としての (Self-Evaluations) セルフ・エスティーム」「自尊心としてのセルフ・エスティーム (Feelings of Self-Worth)」の3種にまとめている。この分類に関する詳述は他稿に譲り¹⁾、ここでは、本稿における定義のみを述べることにする。

本稿では、Brownの分類による「グローバル・セルフ・エスティーム」を採用する。これは、人が自分の属性や特徴を超えた全体的・包括的な自己に対する感じ方で、時間・状況を超えて比較的安定し持続する個人の傾向である (このことから、Trait Self-Esteemと呼ばれることもある)。このセルフ・エスティームの高い人は、自分の存在に対し根本的な信頼を持ち、長所短所を総合した上で、または属性を無にした時に、それでも自分を好きでいられる、自己受容できるという健康的なまたは素朴な自己愛を抱いている。そして、他人との優劣や自分の完全性でもなく、「この私でよい (good enough)」と自己肯定感を持つこと等の性質が備わった人であるといえる。

・ 外国語学習における情意的要因・自己評価に関する研究

第2言語・外国語習得研究の分野では、1980年代末期より、学習者に内在する要因 (学習者要因) に関する研究が盛んに行われるようになり、学習者の情意的要因についても関心が持たれるようになった。しかし、その殆どが、外国語教授場面を想定したものであり、情意的要因に関しても、グローバル・セルフ・エスティームを扱ったもの

は、筆者の知る限りなかった。そこで、情意フィルター仮説²⁾・外国語習得に対する動機づけ・外国語不安・外国語運用能力に対する自己評価等の外国語習得における学習者の情意的要因の研究を参考とした。その結果を以下にまとめる(田所：1999)。

学習者に内在する情意要因に関心が高まるにしたがい、動機づけ・外国語学習不安に関する研究が進んできた。前者については、動機づけが外国語学習効果を高めるといふ報告がある(倉八：1991)。後者については、教室活動における外国語不安の存在が明らかになっており(Horwitz, Horwitz, & Cope : 1986, Aida : 1994) また目標言語や文化との接触量が増えるほど不安が減少するという結果もある(倉八：1995)。しかし、動機づけや接触量が外国語使用における快適さを高めるか否かについては定かではない。

学生は、自分の外国語能力を過小評価する傾向がある。細かい文法事項は肯定的に評価しているものの、発話や筆記等、言語の産出について、特に総合的な外国語能力について否定的な評価をしている(Anderson : 1982)。

外国語学習者は自分の外国語能力を正確に評価しているとはいいきれず、過去の多くの数量的研究における客観的能力と自己評価の相関係数を見ると、 $r = .50$ から $.60$ の範囲であった(Blanche & Merino : 1989)。

学習者は、客観的基準ではなく自己の主観的認知に基づいて外国語能力を自己評価しており、過大評価や過小評価をする傾向がある。この実際の言語能力と自己評価の差異に、主観的認知ともいえる

情意要因が関与していると考えられる(MacIntyre, Noels, & Clement : 1997)。

・ 調査の実施

先行研究と予備調査による知見を基に、探索的に調査分析を行った。そのために、本研究を行うに際し必要となる尺度を作成した。次に、目標言語使用における快適さと他の変数との関係を考察し、セルフ・エスティームが外国語学習における情意的要因となり得るか検討した。また、学習者の自分の語学力に対する評価についても言及することにした。

1. 調査の方法

アメリカ合衆国カリフォルニア州サンディエゴ郊外の英語学校・短期大学にて学んでいる日本人留学生を対象に、無記名式の質問紙調査を行った。

2. 質問紙の構成

調査で使用した質問紙は、教示を兼ねた依頼文、項目用紙(6段階評定法)、属性記入用紙(選択式と記述式)、回答後の調査内容説明と謝辞により構成された。

項目用紙は、：英語使用における快適さ(以降「快適さ」と英語力に対する自己評価(以降「自己評価」)について、：セルフ・エスティームについての二つの質問群からなる。各尺度の質問項目を表1.に示す。

質問群Ⅰの「快適さ」とは、留学生が英語使用に関してどのように感じているかを示すものであり、感情的・認知的・身体的反応を含んでいる。「快適さ」には満足や楽しさ、快さ等の積極的快適さと、不安・不

表 1 . 項目用紙の質問項目一覧

項目番号	英語使用における快適さ
1.	英語で自発的に話しかけることは平気だ
3.	私は英語で会話するとき、緊張のあまり知っていることを忘れてしまう*
5.	英語で会話した後は、疲れてぐったりしてしまう*
7.	英語で話すとき、間違えることを気にしない
9.	自分が英語で話しているとき、他の人に評価されているのではないかと心配だ*
11.	私は英語で会話するとき、たいてい気楽にしている
13.	英語で会話した後、ああ言えばよかったとずっと気になってしまう*
英語力に対する自己評価	
2.	私は言いたいことを英語で話すことができる
4.	思ったことに合った英語表現がすぐに浮かぶ
6.	私は正確な英語の発音をすることができる
8.	全体的に私の英語能力は高い
10.	私は英文法に関する知識がある
12.	私は伝えたいことを英語の文章で書くことができる
14.	私は人が英語で話しているのを聴き取ることができる
15.	私は英語の文章を読んで内容を理解することができる
セルフ・エスティーム	
1.	私は全体から見て自分に満足している
2.	私はときどき、自分がでんでだめだと思う*
3.	私は、自分にはいくつか見どころがあると思っている
4.	私はたいていの人がやれる程度には物事ができる
5.	私にはあまり得意に思うことがない*
6.	私は時々たしかに自分が役立たずだと感じる*
7.	私は少なくとも自分が他人と同じレベルに立つだけの価値ある人だと思う
8.	もう少し自分を尊敬できたならばと思う*
9.	どんなときでも例外なく自分を失敗者だと思いがちだ*
10.	私は自身に対して前向きな態度をとっている
11.	私は自分について落胆するあまり、何が一体価値あるものだろうと疑いをおぼえることがある*
12.	私は、人前を気にしたり、はにかみをおぼえることがある*
13.	他の人が私のことをどのように考えているかということが気になる*

* は反転項目

快ではない状態等の消極的快適さがある。ここでは英語を使用する、または英語を使ってコミュニケーションすることに対する楽しさ・気楽さ・安心感が快適な状態であり、緊張や不安等が大きいかほど不快な状態であるといえる。快適さを妨げる不安は重要な意味を持つと考えられるため、尺度の一部は、外国語不安を測定するために開発された Foreign Language Classroom Anxi-

ety Scale (以下 FLCAS と略す) (Horwitz, Horwitz, & Cope : 1986) を参考に作成された。FLCAS は、外国語学習の教室場面における「コミュニケーション不安」「否定的評価に対する恐れ」「テスト不安」を測定している。また、信頼性・妥当性ともに高く、特別な状況によって引き起こされた一時的な不安ではなく、外国語教授場面に特有な個人の持続的な特性としての不安を測るこ

とができ (Aida : 1994) 言語を学ぶという認知的な面だけでなく、教室内での活動、つまり、教師や他の生徒とのやりとり等、ある程度社会的な文脈を持つ外国語学習場面での不安を測るのに適した尺度である (MacIntyre : 1995)。しかし、その名の示すように、教室場面に関連して起こる外国語不安に限定されている。外国語はある人にとっては習得目標であり、ある人にとっては手段であるが、留学生にとって、生活そのものが外国語学習につながっているといっても過言ではないであろう。このように、本稿では、留学生生活を広い意味での外国語学習と捉えていることから、まず、テスト不安に関する項目を除き、本稿に関連する5項目を抜き出し、教室場面に関する表現を英語使用一般に対する表現に改めた。その他、英語を使用することに対する疲労感と内省の2項目を作成した。なぜなら、英語を使用することに対し、身体的・精神的疲労感があったり、自分の英語使用時の失敗に落胆し、いつまでもこだわっていれば、それは快適な状態であるとは言い難いと考えたからである。これらを合わせ、「快適さ」を示す尺度は7項目となった。

英語力に対する自己評価とは、自分の英語力の各技能についてどのような評価をしているのか、いわば、主観的自己評価である。Anderson (1982) による、成人英語学習者の英語力に対する自己評価を調査した質問紙を分析し、得られた8項目 (全体的な英語能力・文法・語彙・発音・話す・読む・書く・聴く) を基に質問文を作成した。よって、質問群では、合計15項目となった。

質問群はセルフ・エスティームを測る

尺度である。本稿では、数ある尺度の中から、Rosenbergのセルフ・エスティーム尺度 (遠藤ら : 1992) を採用した。この尺度は、最も頻繁に利用され、信頼性・妥当性共に高いといわれ (Dutton & Brown : 1997)、また、人が全体的な自分自身の価値に対する感情・感覚に焦点を当てており、グローバル・セルフ・エスティームの尺度に適しているといえる。この他に、セルフ・エスティームの低さを社会的不適切の感情を要因とし、社会場面での不安・自己意識・個人的な無価値の感情を問うJanis & Fieldの尺度 (遠藤ら : 1992) から、本調査目的に沿い、かつ、Rosenbergの尺度には含まれていない3項目を抽出した。そしてこれらを加えた13項目を本稿におけるセルフ・エスティームの尺度とした。

3. 英語力の測定法

本稿では、一般に行われている統一資格試験 (Standardized test) による得点を尺度として利用することにした。Standardized testによる測定法の利点としては、評価が客観的で数値により表わされること、尺度が出題問題の変更に関わらず常に一定であること、回答者の所属が異なっても統一した尺度で比較できること等が挙げられる (田所 : 1999)。さらに、Thomas (1994) は、調査結果を一般化しやすく、試験問題の公開審査が可能であること、試験問題の妥当性が常に研究されていることを述べている。本稿では、Standardized testの中でも、アメリカにある多数の学校機関が留学生の入学資格の一つとしてスコアの提出を義務づけ、多くの留学生が受験を経験しているTOEFL (Test of English as a Foreign Language)

外国語使用における「快適さ」に対する自己評価とセルフ・エスティームの関係についての考察

の得点を尺度とした。

調査の結果と考察

1. 回答者の属性

有効回答者数は111名中、106名であった。基本的属性と背景は次のとおりである。

表2. 回答者の性別と学校の種類

	英語学校	短期大学	合計
男	10	30	40
女	17	49	66
合計	27	79	106

性別は男性40名(37.7%)、女性66名(62.3%)であり、男女比はおおよそ4対6であった。

学校別では、英語学校27名(25.5%、男性10名、女性17名)、短期大学79名(74.5%、男性30名、女性49名)であり、短期大学在学者が7割を超えた。

表3. 回答者の年齢

年齢(歳)	度数分布		
最小	18	18 ~ 20	35 (33.0%)
最大	34	21 ~ 23	41 (38.7%)
範囲	16	24 ~ 26	21 (19.8%)
平均値	22.30	27 ~ 29	4 (3.8%)
標準偏差	3.26	30 ~ 34	5 (4.7%)

年齢は18歳から34歳までで、平均年齢は22.30歳、標準偏差は3.26であった。18歳から23歳が約7割を占めている。これは、調査を大学入学の前段階である英語学校、短期大学で行ったことが理由として挙げられる。

表4. 回答者のアメリカ滞在期間

滞在期間(ヶ月)	度数分布		
最小	2	~ 6	36 (34.0%)
最大	60	7 ~ 12	15 (14.2%)
範囲	58	13 ~ 24	30 (28.3%)
平均値	17.18	25 ~ 36	17 (16.0%)
標準偏差	14.21	37 ~ 48	4 (3.8%)
		49 ~ 60	4 (3.8%)

アメリカ滞在期間は2ヶ月から60ヶ月で、平均値は17.18ヶ月、標準偏差は14.21であった。滞在期間は、2ヶ月から60ヶ月(5年)までと58ヶ月の大きな開きがあった。これは、英語学校または短期大学に入学したばかりの者から、英語学校にて入学準備をした後、短期大学に進学したもので、学生の背景に広い幅があったためと思われる。

表5. 留学目的(二つまでの複数回答)

留学目的	回答数
学位取得のため	52 (28.7%)
英語を身につけるため	52 (28.7%)
今後、アメリカで就職するため	21 (11.6%)
資格取得のため	18 (9.9%)
アメリカでの生活を体験するため	15 (8.3%)
アメリカ文化を学ぶため	5 (2.8%)
アメリカでの授業を体験するため	4 (2.2%)
その他	14 (7.7%)
回答合計	181

留学目的は、大きな理由のものから2つまでを選択する複数回答であったため、1つのみを選択した者、2つ選択した者を合わせ、回答数は181であった。結果を見ると、英語を手段として利用するために習得を目標とする道具的動機づけ³⁾が高いといえる。

2. 分析結果

分析を始めるにあたり、データの基本処理を行い、尺度を検討した。個々の尺度の信頼性を測るクロンバックの係数を算出したところ、快適さが $\alpha = 0.80$ 、自己評価が $\alpha = 0.85$ 、セルフ・エスティームが $\alpha = 0.90$ となり、ほぼ内の一貫性が成立していると考えた。変数の基本的統計量を以下に示す。

表 6 . 変数の基本的統計量

N = 106	最 小	最 大	範 囲	平均値	標準偏差	尖 度	歪 度
滞在期間	2	60	58	17.18	14.21	0.97	1.13
客観的英語力 (N=94)	373	637	264	486.35	43.30	1.88	0.30
快適さ	12	42	30	26.30	6.34	- 0.49	0.11
自己評価	9	48	39	25.40	6.73	0.72	0.32
セルフ・エスティーム	16	77	61	49.77	11.82	0.21	- 0.28

積率相関係数を算出した。その結果を表 7 .
に、そしてその関係を図 1.に示す。

2-1. 相関分析

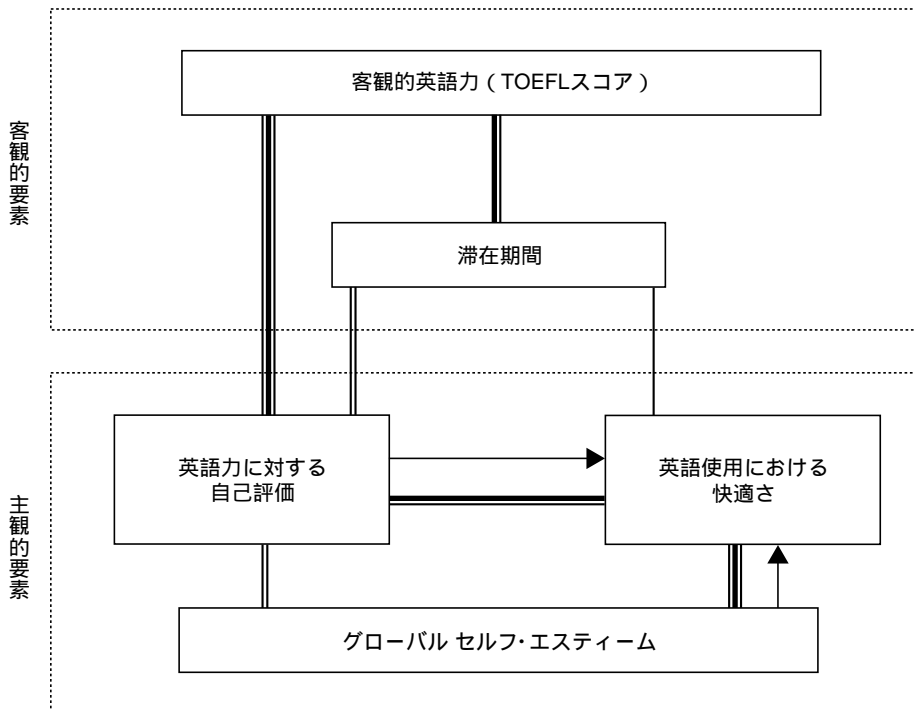
変数間の相関を調べるため、ピアソンの

表 7 . 変数間の相関マトリックス

N = 106	1.	2.	3.	4.	5.
1. 滞在期間	- -				
2. 客観的英語力 (N = 94 ^a)	.403**	- -			
3. 快適さ	.282**	.171			
4. 自己評価	.383**	.576**	.469**	- -	
5. セルフ・エスティーム	.031	.133	.523**	.362**	- -

**p < .01 (両側検定) 注^a: リストワイズ法による。

図 1 . 変数間の関係



注: 矢印は説明力とその方向性を、棒線は相関関係の強度を表す。

外国語使用における「快適さ」に対する自己評価とセルフ・エスティームの関係についての考察

5つの変数間の相関を概観すると、セルフ・エスティームと滞在期間・客観的英語力、快適さと客観的英語力に相関が無いことを除いては、それ以外の全ての変数間で、統計的に有意な正の相関を示している。快適さと他の変数の相関は、滞在期間との間では弱いですが、自己評価とセルフ・エスティームとでは、中程度の相関が見られた。客観的英語力と自己評価の相関係数が $r = 0.58^{**}$ ということは、対象者は自分の英語力をある程度は把握しているものの、正確に評価しているとは言い難い。この、実際の英語力と自己評価の違いに、過大評価や過小評価を引き起こすような情意的な要因が働い

ていると思われる。なお、過去の多くの研究において、目標言語に対する学生の客観テストの得点と自己評価の相関係数は $r = 0.50 \sim .60$ を示しているという (Blanche & Merino : 1989)。今回得られた数値は、このような先行研究の結果を支持する形となった。

2-2. 重回帰分析

英語使用における快適さは、本稿で扱った4つの変数から、どの程度、予測・説明されるのかを調べるために、快適さを目的変数、他を説明変数とする重回帰分析を行って、直接的な説明力の検討を行った。

表8. 快適さを目的とした重回帰分析結果 (N = 94)

説明変数	非標準回帰係数 (B)	標準誤差 (SE B)	標準偏回帰係数 ()
自己評価	.360	.107	.388**
セルフ・エスティーム	.179	.053	.319**
滞在期間	.097	.044	.208
客観的英語力	-.026	.016	-.108

寄与率 $R^2 = .368$ 自由度調整済み寄与率 $R^2 = .339$ ** $p < .001$
 注：有効な TOEFL スコアの関係上、サンプル数は 94 で行われた。

この回帰式は0.1%水準で有意であった (F (4,89) = 12.942, $p < 0.001$)。快適さに対する4つの変数の寄与率を見ると、快適さを予測する情報のうち、約37%がこれらの変数によって説明できることを示しているが、標準偏回帰係数、及び、その有意性の検定結果から、本稿で設定した変数のうち、快適さを予測する回帰式にとって有効なのは自己評価とセルフ・エスティームであることが分かった。

3. 考察

本調査で得られた結果から、以下のことが考えられる。

快適さは、目標言語圏での生活とその言語に対する「慣れ」や実際の英語力よりも、むしろ個人のセルフ・エスティームや自分自身がどのように英語力を評価しているのか (自己評価) といった情意的な変数に、より強い相関を持っていること、並びに、重回帰分析において、セルフ・エスティームと自己評価が快適さに対する有意な説明力を持つことから、英語使用における快適さには、自分の英語力を肯定的に評価していること、全体的な自己を肯定的に受け容れていることが重要になるといえる。

滞在期間は客観的英語力と弱～中程度

の相関があるものの、快適さとの間にはあまり相関はなく、自己評価とも弱い相関しかなかった。一般に、目標言語圏に長く滞在し、その言語の接触量が増え慣れてくるほど、目標言語使用に対する不安は軽減されるであろうという通念があり、それを支持する研究報告（倉八：1995、Aida：1994）もあるが、本研究の結果を見る限りにおいて、現地に長く滞在すれば、目標言語に対する自己評価も上がり、目標言語使用が快適になるという訳にはいかないようである。つまり、目標言語圏での滞在期間の長さや（経験や生活スタイル等、英語との接触度に違いはあると思われるが）実際の英語力よりも、情意的なセルフ・エスティームや英語力に対する主観的自己評価の方が英語使用における快適さに関しては、より関係が強いことが分かった。

セルフ・エスティームは快適さと中程度の相関を持つが、自己評価とは弱い相関しか持たなかった。快適さに関していえば、セルフ・エスティームが高ければ、自己に対しての信頼も高く、物事に対する肯定的な感情を持つことから、快適さとの間に相関関係が表われやすいものと思われる。一方、今回の結果からは、全体的な自己に対する感じ方であるセルフ・エスティームが、必ずしも個々の分野の能力に対する自己評価とは関係があるとはいえないことが分かった。その理由を考えると、いくつかの場合を想定することができる。例えば、セルフ・エスティームが低い人々の中では、それ相応の評価をしている者、虚勢を張って過大評価をする者、完璧を要求するあまり能

力不足感にさいなまれたり、否定的に捉えるために過小評価する者がいると考えられる。また、セルフ・エスティームが高い人々の場合でも、自身を楽観的に捉え、自分の能力を肯定的に見ているために過大ともいえる評価をする者もいれば、評価のよし悪しによって自己価値が左右されることはないを知っていることで、より正当な自己評価を下す者もいるであろう。以上のような場合が混在し複雑に絡み合っているために、相関関係として表われにくいのではないかと考える。この相関として表われにくい部分にどのような関係性が存在しているかは、今後の研究の課題としたい。

以上の考察から、目標言語使用における快適さを学習者にとってプラスの要因とするならば、全体的な自己に対する価値の感情であるセルフ・エスティームは快適さにとって重要であり、外国語習得における情意的要因となり得ると考える。

相関分析から、対象者は自分の英語力のある程度は把握しているが、正確に評価しているわけではないことが分かったが、参考として、英語力の各技能においてどのような傾向があるかを見るために、自己評価の各項目に対し、高い評価をした者（上位2位までを選んだ場合）と低い評価をした者（下位2位までを選んだ場合）の全サンプル数における割合を算出した。しばしば日本人の発話力不足や自信の無さが指摘されるが、本研究において対象とした留学生に関しては、発話に対し低い評価をした者は約32%であった。聴解は高い評価をしている者が約29%あり、どちらかという高い評価の者も含めると約71%となっている。

これは、目標言語圏での生活を通しての習熟、いわゆる耳が慣れてきたという感覚によるものが大きいと思われる。一方、発音は約51%、語彙は約46%、そして全体の英語力については約63%が低い評価をしている。これは、留学中に英語母語話者の発音を聞いたり、会話中に自分の発音が相手に通じなかったり、広い語彙力を必要とする生活の場の中で、語彙の足りなさを痛感させられるためであると思われる。また個々の技能に対しては自己の能力を肯定的に評価していても、全体的な英語力の評価が低くなってしまふのは、狭義の英語力というものだけではなく、自分の言語運用能力に対する理想と期待、それゆえに起きる能力不足への意識過剰や、場面に即したコミュニケーション方略の知識不足による失敗経験、さらにはこれらにより自分自身の価値に対する評価までもが入り込んできてしまふからではないかと思われる。

・ 問題点と課題

まず、対象者については、統計的手法を用いるに足るサンプル数は得られたものの、属性が限られていたため、本稿の結果をアメリカで学ぶ日本人留学生に一般化するのは性急であり、今後、対象者の幅を広げていく必要がある。また、客観的英語力のデータの正確さを改善するために、本研究で利用したTOEFLのようなStandardized testの他にも、調査目的に合致した試験や測定法を作成し、併用することが重要であろう。そうすれば、今回行うことのできなかった発話力の測定も可能となる(ただし、発話力診断試験を行った場合、スピーチ不安等の情意的要因が働いてしまい、本来の発

話力を表しているかという疑問が残るため、注意深い測定が必要である)。さらに、重回帰分析で寄与率の合計が $R^2 = 0.37$ 、すなわちモデルの説明力が37%であったことから、今回分析モデルに含んでいない変数にも、結果に影響を与えているものがあると思われるため、それらをいかに測定し、変数に組み込んでいくかという点も課題となろう。

本稿では、外国語習得研究において今までにない「外国語使用における快適さ」というテーマを扱ったため、参考となる先行研究が限られており、本稿で示したように、構成概念、尺度の作成等は、筆者が探索的に行うほかなかったが、それでも全体としては、目標言語圏で生活する目標言語使用者の情意的要因を知る上で大きな示唆が得られたと言えよう。

・ おわりに

本研究により得られた結果を教育場面に適用するならば、次のことが言えるであろう。外国語学習者は教育活動としての学習を終えた後、またはその場を離れたとき、コミュニケーションという実践場面に向き合わなければならないのであるから、教育活動中もコミュニケーションを楽しむという目的が考慮されるべきであろう。学習者の動機を強め、目標言語の習得意欲を高めると同時に、外国語使用に対する安心感を与えることが大切ではないであろうか。さらに、その目標言語の能力に優れているということ自体が絶対的価値を有するというわけではなく、それが個人としての価値を決めることはないという気づきを与えることも重要であろう。そしてこの理解が、かえって彼らの言語運用能力を引き出すこと

になるのではないかと考える。その方法として、例えばワークショップを開いて、気づきを与え、自己信頼を促進する機会を作ることや、社会的な対人関係に必要な技術を身に付けるために心理学的手法を用いたソーシャルスキル（人間関係技術）訓練（矢島・田中：1996）を取り入れることも可能であろう。また、留学カウンセラーやアドバイザーがこのような視点を持つことも有用であると思われる。

コミュニケーションにとって、言語を正確に操り情報を授受しあうことも重要であるが、人と人との心豊かな交流の大切さも忘れてはならないであろう。それには、一人ひとりがリラックスしてそのコミュニケーションを楽しんでいるかどうかが鍵となる。セルフ・エスティームは外国語でコミュニケーションするというストレスや不安、否定的情動の緩衝剤となり、異文化環境の中の自分を受容するために大きな役割を担っていると思われる。そして、自己の受容が相手の受容へとつながり、思いやりのある充実した交流をすることができるようになるのではないだろうか。

注

1) 他の2つのセルフ・エスティームについては、簡潔に以下のように述べておく。

「自己評価としてのセルフ・エスティーム」は、人が自分のもつ様々な能力や属性・性質・特徴などに対して行う一つ一つの評価の意味で使われており、個々の分野に対して特有な（Domain-Specific）セルフ・エスティームであるといえる。

「自尊心としてのセルフ・エスティーム」は、物事の肯定的または否定的な結果に対して引き起こされる、つまり、状況次第で満たされたり、傷つ

けられたりするような、自己の価値に対する一時的な反応や感情の状態を指して使われている。グローバル・セルフ・エスティームが特性（Trait）セルフ・エスティームであるのに対し、これは、状態（State）セルフ・エスティームであるといえる。

- 2) Krashenの情意フィルター仮説。新しい言語を、動機づけ、ニーズ、態度、感情の状態に基づいて、無意識にふるいにかける心理作用の一部（Dulay, Burt, & Krashen : 1984）である情意フィルターの存在を仮定し、言語習得の心理作用を説明しようとしたものである。
- 3) 外国語習得に影響を及ぼす動機づけは、統合的動機づけ・道具的動機づけがよく知られている。前者は、目標言語話者・文化の理解を深めるためや、目標言語集団に参加し、より多くの人と交流するために、その集団で話されている言語の能力を向上させたいという動機づけのことであり、後者は、職を得るために有利である等といった実用的な理由から、ある新しい言語の能力を向上させたいという動機づけのことである。

参考文献・資料

- Aida, Y. 1994. Examination of Horwitz, Horwitz, and Cope's construct of Foreign Language Anxiety: The Case of Students of Japanese. *The Modern Language Journal*. 78(2): 155-168.
- Anderson, P. L. 1982. Self-esteem in the Foreign Language: A Preliminary Investigation. *Foreign Language Annals*. 15 : 109-114.
- Balanche, P. & Merino, B. J. 1989. Self-Assessment of Foreign-Language Skills: Implications for Teachers and Researchers. *Language Learning*. 39 : 313-340.
- Brown, J. D. 1998. *The Self*. Boston: McGraw-Hill .
- Dulay, H., Burt, M., & Krashen, S. 1984. 牧野高吉

外国語使用における「快適さ」に対する自己評価とセルフ・エスティームの関係についての考察

- (訳)『第2言語の習得』鷹書房プレス.
- Dutton, K. A. & Brown, J. D. 1997. Global Self-Esteem and Specific Self-Views as Determinants of People's Reactions to Success and Failure. *Journal of Personality and Social Psychology*. 73 : 139-148.
- 遠藤辰雄(編) 1981. 『アイデンティティの心理学』ナカニシヤ出版.
- 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千壽(編) 1992. 『セルフ・エスティームの心理学』ナカニシヤ出版.
- Horwitz, E. K., Horwitz, M. B., & Cope, J. 1986. Foreign Language Classroom Anxiety. *The Modern Language Journal*. 70 : 125-133.
- 梶田叡一.1988. 『自己意識の心理学』[第2版] 東京大学出版会.
- 倉八順子. 1991. 「外国語学習における情意要因についての考察」『社会学研究科紀要』33 : 17-25 . 慶応義塾大学大学院
- 倉八順子. 1995. 「不安と第二言語習得」『明治大学人文科学研究所紀要』37 : 77-100 .
- MacIntyre, P. D., Noles, K. A., & Clement, R. 1997. Biases in Self-Ratings of Second Language Proficiency: The Role of Language Anxiety. *Language Learning*. 47 : 265-287.
- MacIntyre, P. D. 1995. How Does Anxiety Affect Second Language Learning? A Reply to Sparks and Ganschow. *The Modern Language Journal*. 79 : 90-99.
- 溝上慎一. 1999. 『自己の基礎理論 実証的心理学のパラダイム』金子書房.
- 田所真生子. 1999. 「外国語使用における自己評価と Global Self-Esteemの影響 - 日本人留学生の英語使用を通して - 」名古屋大学大学院国際開発研究科修士論文.
- Thomas, M. 1994. Assessment of L2 Proficiency in Second Language Acquisition Research. *Language Learning*. 44 : 307-336.
- 矢島智子・田中共子. 1996. 「ソーシャルスキル訓練を取り入れた英語教育 - アメリカに留学する日本人高校生を対象として」異文化間教育学会編『異文化間教育』10 : 150-166 . アカデミア出版会 .